

2017年6月1日 2時間目だより

もし、もしも。もしもだよ。毎日、新しい服を着なくてはいけないとなったら。もし、大学に行ったら、建物がすべて新しかったら。きのうとつながるものがなにもなかったら、どうだろう。痕跡があるから、昨日と今日、昨日の自分と今日の自分がつながる。そんな気持ちを「痕跡で人は生きている」と山本さん。

「跡」は楽しい。「跡を見つけてから、なぜそうなったのか、過去のことを想像するのは楽しい」と書く大久保さんは「人間の手を見比べてもよいのでは」と提案している。おもしろそうなアイデアだ。手は人生痕かも。その手と握手もしてみたい。

坂田さんも痕跡の背景に関心が湧いたようだ。「その痕跡に、歴史や、誰がどこで何をしたかを深く考えることで、痕跡への興味が深まる」。

痕跡はえてして非意図的。「自分たちの予想の裏にあるので、とても興味深い」。柴崎さんは、さらに、痕跡はさまざまに「その人自身が痕跡だと認識したら、それは他の人にはそう見られないとしても痕跡として成り立つ」と書いてくれた。一戸さんは反対に困っている。

「痕跡と聞いて、思いつきすぎて何がどこまで痕跡なのか、考えさせられた」。

そう、そうなのです。なんでも痕跡。だから、「注意深く見れば何かおもしろい発見があるかもしれない」(大島さん)。視点を決めないと、收拾がつかなくなるでしょうね。西田さんも「日常には痕跡があふれている。教室を見回しても、揃っていないイスが目に入る」。身体の痕跡の話は「おもしろかった」。「私の脚にも鉛筆を刺してしまった黒い跡」。

みんなの発表で「写真の見方が変わりました」と書いてくれたのが三島さん。一つの写真にいろいろなコメントがつきましたからね。忽滑谷さん。みんなの写真を見て、「ふだん歩いていたところや通り過ぎていた部分に注目している」と気づかされた。

佐志さん。「自分の寝癖は斬新だと思ったけれど、反応薄で残念。出直してきます」。本来のヘアスタイルがわからないからではないでしょうか。たとえば磨耗は、もとの状態が想像できますよね。

「川浦先生は思っていたよりおっとりしていた人で、発表するとき緊張せずにできました。そして考え方が予想外なので」「次はどんな言葉が出てくるんだろうと楽しみでした」(柳)。それは、それは。考えながら話しているので、自分でもどんな言葉が出てくるのか、わからないので、毎日、自分発見です。

2017.6.10

川浦康至